昭和48年9月1日発行（毎月1回1日発行）第22巻・第11号　昭和29年6月23日　日本国有鉄道特別扱承認雑誌第2836号　昭和30年3月24日第三種郵便物認可

航空ファン

THE KOKU-FAN

ワイドカラー
WIDE COLOUR

中島
2式単戦鍾馗



☆特集☆
墜落したTu-144　対潜哨戒機のすべて
特集・空母で来日したアメリカ海軍機
4cc 35用RC "フレンドシップJr"

'73
SEPTEMBER
9

$3.00



空母レンジャーに配備されている第21戦闘飛行隊（VF-21）所属のF-4JファントムII。前方の機体は第2空母航空団（CVW-2）の司令官機。(Photo by DMS ...)



A-4Eから給油中の第154戦闘飛行隊（VF-154）のA-4J。これもレンジャー配属部隊で，中央の機体はCVW-2の司令官機である。
(Photo by ENS J. Jacobs)



空母コーラルシーに配備されていたA-6Aイントルーダー。第15空母攻撃航空団(CVW-15)の司令官機。後方に北ベトナムで機雷掃海に使われたRH-53ヘリが見える。キュービ・ポイントにて。
(Photo by ENS J. Jacobs)



5月末に佐世保に入港した空母コーラルシーのファントムII。〔上〕さめ口のマークをつけた第111戦闘飛行隊（VF-111）機。200の番号機は第15空母攻撃航空団（CVW-15）の司令官機。〔下〕前方の機体は第51戦闘飛行隊（VF-51）の所属機である。
（Photos by H. Hamano）





〔上〕第22攻撃飛行隊（VA-22）のA-7EコルセアII。〔下〕第131電子偵察飛行隊（VAQ-131）のEA-6Bプラウラー。
2枚ともフィリピンのキュービイ・ポイントにて撮影。
（Photos by ENS J. Jacobs）





〔上〕第164攻撃飛行隊（VA-164）のA-4Fスカイホーク。〔下〕第212攻撃飛行隊（VA-212）のA-4Fで、第19空母攻撃航空団（CVW-19）の司令官機。ともに空母ハンコック配備部隊。キュービイ・ポイントでの撮影である。

(Photos by ENS J. Jacobs)





飛行テスト中の米海軍の新鋭F-14Aトムキャット。〔上〕ミラマー海軍基地で編成されたF-14Aの最初の訓練部隊第124戦闘飛行隊(VF-124)の1機で，シリアル158620号機。このほどパリの航空ショーに出場したのもこの部隊の所属機である。
(Photo by Duane A. Kasulka)
〔下〕ポイントマグーの海軍テストセンターのF-14A。シリアル158614号機。(Photo by MSGT Benjamin Knowles)



クラークフィールドの輸送機たち

TRANSPORTS AT CLARK AFB





フィリピンのクラークフィールドにのんびりと翼を休める米空軍の輸送機たち。前ページはC-47とC-123プロバイダー，写真上はC-119パケット。いずれも迷彩に身をつつんでベトナムの空をかけまわった歴戦のつばさである。C-47とC-119は機銃を積んでガン・シップとしても使われており，C-123は薬剤を積んで枯葉作戦にも駆り出された。
写真下は北ベトナムからの捕虜送還"作戦"「ホーム・カミング・プログラム」で活躍したC-141Aスターリフター。





〔上〕マトラとサイドワインダー・ミサイルをつけたミラージュF.1。〔下〕ミラージュIIIの写真偵察型ミラージIII R。右の方に対潜哨戒機アトランチックの尾部が見える。





〔上〕搭載武器と一緒に並べられたジャガーE。手前は単座のジャガーAである。〔下〕フランス空軍の主力戦闘爆撃機ミラージュIIIE。





［上］イタリアから出品されたアエリタリアG91Y。後方にバイザー型扉を開いたワールド・エアウェイズの輸送型ジャンボ747。［下］これもイタリアから参加したマッキMB326G。後方に複座練習型ビゲンSK37。





5月末から6月初めにかけて三沢射爆撃場所で行なわれたXT-2の第1次射爆撃試験でのスナップ。ロケット弾発射ポッドをつけた3号機。

XT-2, No.4 plane, under armsystem evaluation test. Seen under main wings are pods for 2.75-inch practice rockets.



これも武装テスト中のXT-2 4号機。主翼下は2.75インチ・ロケット訓練弾ポッド。



これも武装試験でのシーン。〔上〕三沢基地のタワー前で発進前のXT-2 4号機（手前）と2号機。〔下〕主翼下に750ポンド訓練爆弾4発を吊した2号機。始動準備中である。

(up) XT-2, No.4 plane, ready to start flying, before the Misawa JASDF Base control tower (this side) and XT-2, No.2 plane, (down) XT-2, No.2 plane, armed with four 750-pound practice bombs under main wings. Ready to start.



"レッドアローズ" のナットT1

"Red Arrows" of Gnat T1s, Central Flying School. (Photo by Inter-Air Press)





イギリス空軍の代表的な曲技飛行チーム"レッドアローズ"のナットT1。ワイドカラー写真。本文記事とあわせてご覧ください。写真上は"ロール・バック・パス"演技中の一瞬。

Red Arrows playing a new Roll Back Pass (Photo by Inter-Air Press)



"レッドアローズ" はリトルリシントン空軍基地にあるセントラル・フライング・スクール（CFS）の派遣部隊としてケンブル基地を本拠としているが、ここの写真は今年の4月10日、リトルリシントンで撮影したもの。新年度のプログラムに沿って訓練中である。イギリス空軍の公式の曲技チーム "レッドアローズ" は、最近のパリ航空ショーに出演，昨年度はアメリカでも演技を行なっており，活躍の舞台は国際的。その真紅の翼の軽快華麗，確実な演技にはファンも多い。

(Photo by Inter-Air Press)





“レッドアローズ”はリトルリシントン空軍基地にあるセントラル・フライング・スクール（CFS）の派遣部隊としてケンブル基地を本拠としているが，ここの写真は今年の4月10日，リトルリシントンで撮影したもの。新年度のプログラムに沿って訓練中である。イギリス空軍の公式の曲技チーム“レッドアローズ”は，最近のパリ航空ショーに出演，昨年度はアメリカでも演技を行なっており，活躍の舞台は国際的。その真紅の翼の軽快華麗，確実な演技にはファンも多い。

（Photo by Inter-Air Press）





英空軍爆撃／航法競技会のバルカンB2

Vulcan B2 Bombers participating RAF Strike Command Bombing

イギリス空軍の攻撃軍団が毎年開催している“爆撃/航法競技会”。今年は4月29日から5月5日まで，ウォデントン空軍基地で，近東空軍やアメリカ戦略空軍の爆撃機まで参加して開かれた。ここの写真はそのバルカンB2爆撃機。143ページ本文記事を参照ください。

写真上のXM611はウォデントンの第1グループ所属の1機。高速低空パスのシーン。写真下のXM597もウォデントン部隊の1機で，低速パス。ウォデントンの部隊は第44，50，101の3スコードロンである。





イリューシンIℓ-76輸送機

ソ連の新鋭輸送機イリューシンIℓ-76。71年のパリ航空ショーで西側に初めて公開されたターボファン4発の貨物輸送機。今回のパリ・ショーにも展示されて，健在なところをみせた。アエロフロートの1971年から75年までの機材補強5ヵ年計画で，Iℓ-62M，L-410，Tu-144などとともに装備機材にあげられている1機。シベリア方面への輸送に投入する計画という。

(Photos by APN)





落下増槽をつけたXT-2と南極のLC-130

〔上〕航空自衛隊岐阜基地で飛行テスト中のXT-2　2号機。主翼下面にドロップ・タンクを装備，主翼上面には，初期のころは見られなかった境界層板を追加装備している。

（Photo by T. Hoshina）

〔下〕南極の科学観測で活躍するロッキードLC-130ハーキュリーズ。現在南極では，米科学基金の援助で，15カ国の科学者が参加して"ディープ・フリーズ73作戦"が行なわれているが，写真はその資材や人員輸送に動員された米海軍のLC-130。ソリをつけているのに注意。



特集・アメリカ海軍機

レンジャーの搭載機





去る6月中旬、横須賀に寄港した米攻撃空母レンジャー（CVA-61）は、本国送還もまぢかにひかえ、ごらんのように搭載機を満載の状態で碇泊した。
前ページは艦首を望んだところで、前部飛行艦橋から甲板には、コルセアII、イントルーダー、ファントムIIが整然と並べられている。配属されているF-4Jファントム部隊は第21戦闘飛行隊（VF-21）"フリーランサーズ"と第154戦闘飛行隊（VF-154）"ブラックナイツ"。写真上はVF-21、下はVF-154所属の1機である。







〔上・下〕第21戦闘飛行隊"フリーランサーズ"の1機。11ページのカラー写真にあるのと同じく、第2空母攻撃航空団（CVW-2）の司令官機である。



〔下〕艦橋より後部甲板を望む。手前にRA-5Cビジランテイが1機。その後方にF-4J、A-7Eが並んでいる。RA-5Cは第5偵察攻撃飛行隊（RVAH-5）"サベィジサンズ"の所属機。A-7EコルセアII部隊は、第25攻撃飛行隊（VA-25）"フイスト・オブ・ザ・フリード"と蜂のマークでおなじみの第113攻撃飛行隊（VA-113）"スティンガーズ"である。中央にまるい傘のE-1Bも見える。





(上・下)A-6Aイントルーダー。尾翼につるぎのマークを描いた第145攻撃飛行隊（VA-145）"スォーヅマン" 所属機。ごらんのように全機とも増槽のみで、外装の武器はなし。すっかりくつろいだ翼たちである。





〔上〕第25攻撃飛行隊のA-7E。〔下〕第113攻撃飛行隊"ステンガーズ"のA-7E。



〔下〕哨戒の任についているSH-3Gシーキング　ヘリコプタ。第1戦闘支援ヘリコプタ飛行隊（HC-1）の所属機。





コーラルシーの搭載機







先月号のアート・ページで一部紹介したように、5月末には攻撃空母コーラルシー（CVA-43）が3年4カ月ぶりで佐世保に入港した。カタパルト修理のため、フイリピンのスービック・ベイより直行したものであるが、A-6、A-7は全機キュービイ・ポイントへ残しての来日。F-4BファントムIIの一部が積まれたのみの飛行甲板は、閑さんとしている。
〔左・下〕尾部に"旭日旗"のマークをつけた第111戦闘飛行隊（VF-111）"サンドオーナーズ"のF-4B。〔左下〕第51戦闘飛行隊（VF-51）"スクリーミングイーグルス"所属のF-4B。（14ページ・カラー参照）



第30回 パリ航空宇宙ショー



HIGHLIGHTS OF PARIS AIR SHOW

ソ連のＳＳＴ　Ｔｕ-144の墜落という大きな話題をなげて幕を閉じた第30回パリ航空宇宙ショー。先月号につづいて、その主な展示機のスナップをご紹介することにしよう。

〔上〕先月号でも紹介したが、スウェーデン空軍の主力戦闘攻撃機サーブ37ビゲン。写真の機体は複座練習型のＳＫ37。ビゲンはアフターバーナをふかしての編隊離陸なども見せ、飛行ショーでも気をはいた。〔下〕複座のジャガーＥ。ジャガーも単座、複座の両型が展示された。



第２報





〔上〕屋内展示場。フランスのチュルボメカ・エンジンのコーナーである。〔下〕機首に小翼のひげをつけたダッソー・ミラン。操縦席がのぞけるように、タラップ付きで展示された。後方はアトランチック対潜機。〔最下段〕単座のジャガーも搭載武器とともに。







ホーカー　ニムロッド（上）や小型機もいっぱいの地上展示場。



〔下〕イタリアの展示機のコーナ。手前はSIAIマルケッティSM.1019。



TRANSPORTS AT CLARK AFB (本文記事参照)



クラーク　フィールド





ベトナム戦が一段落したフイリピンのクラークフィールド空軍基地には輸送機がいっぱい。補給任務にベトナムの空をかけまわった影武者たち。硝えんにくすんだ翼をつらねて、広いエプロンをうめている。

〔前ページ〕輸送機群のなかにF-4EファントムIIがただ1機。この基地を本拠としている第388戦術戦闘連隊（388TFW）第34戦術戦闘飛行隊（34TFS）の所属機である。









〔上2枚〕フェアチャイルドC-123。ゲリラ掃討の南ベトナム戦でもっとも活躍した輸送機がこのC-123であった。特殊戦飛行隊に装備されて、悪名高い枯葉作戦を行なったのも本機である。〔左〕尾翼に赤十字のマークをつけて、北ベトナムからの捕虜送還にあたったロッキードC-141A。戦闘たけなわの頃は、傷病兵の後送にも活躍した。〔下〕ベトナム戦後半に動員された老兵C-119。ミニガンを装備してガン・シップとしても使われた。





スナップ だより



〔上〕横田基地に初めて姿を見せた米海兵隊のＵＣ-118Ｂ。大西洋艦隊海兵部隊の所属機で，尾翼のマークは赤。（昭島市・山内裕之）。



〔上〕厚木基地業務が縮小されて，最近横田基地への海兵機の飛来がしきり。これもその１機で，第17司令部付整備飛行隊（
&MS-17）の所属機。（昭島市・大塚勝彦）〔下〕全日空の路線を引退したＦ.27フレンドシップは，つぎつぎに外国の航空会
に売却されて日本を去っている。写真はリンバーグ航空に引渡される１機。大阪空港で飛行テスト中。（西宮市・浜野博司）



ワイドカラー
WIDE COLOUR

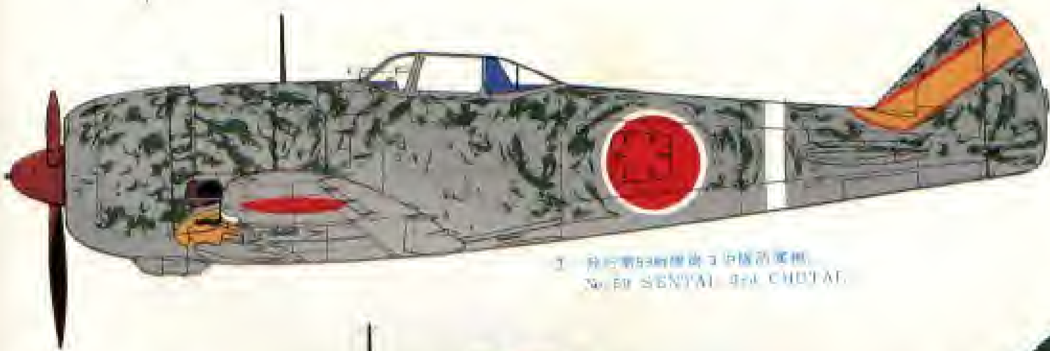
NAKAJIMA KI44-II SHOKI



① 飛行第9戦隊戦隊本部所属機。
No. 9 SENTAI (Fighter Group) Commandant Sugo



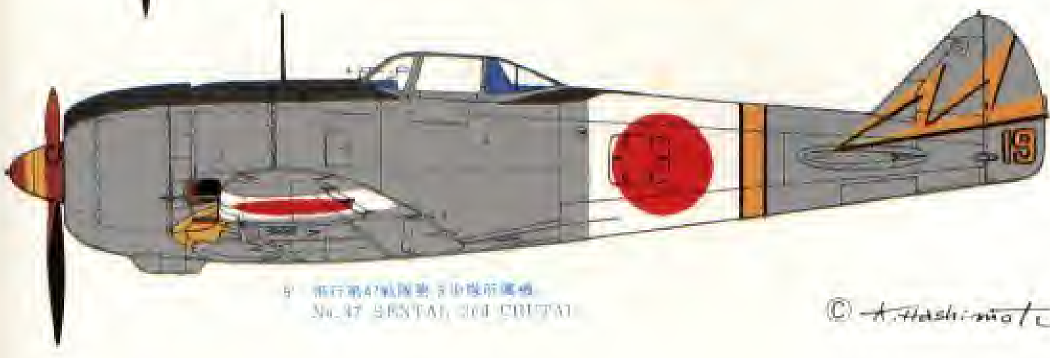
② 飛行第87戦隊第2中隊所属機。
No. 87 SENTAI, 2nd CHUTAI (Squadron).



③ 飛行第85戦隊第3中隊所属機。
No. 85 SENTAI, 3rd CHUTAI.



④ 飛行第22戦隊所属機。
No. 22 SENTAI



⑤ 飛行第47戦隊第3中隊所属機。
No. 47 SENTAI, 3rd CHUTAI

© A. Hashimoto


707
700

CURTISS SB2C HELLDIVER

カーチスSB2C ヘルダイバー

大戦後半に活躍したアメリカの艦上急降下爆撃機ヘルダイバー。そのすばらしいスナップを集めてご紹介することにしよう。

〔上〕 陸軍部隊を支援して、ミンダナオのダバオ地区爆撃に向うSB2C。陸上基地部隊で、マラバング飛行場から作戦した第244中隊の所属機。1945年6月12日の撮影。

〔右〕 攻撃を終えて帰投。着艦フックを降して，母艦上空を旋回中。空母ホーネット(CV-12)に配属されていた第12爆撃中隊の所属機。1945年2月，東支那海で作戦中。



CURTISS SB2C HELLDIVER







〔上〕爆弾を装備して出撃。空母ヨークタウン（CV-10）に配備されていた第3爆撃中隊所属のSB2C-4。1945年2月22日の撮影。

（Navy National Archives Photos）

［下］空母レイクシャンプレイン（CV-39）から発進したSB2C-5。第150爆撃中隊の所属機。1945年8月の撮影。終戦まじか，搭乗員もゆとりのある表情。




35

今回は2次大戦のアメリカ海軍急降下爆撃機カーチスSB2Cヘルダイバー。ドーントレスの後継機として1943年11月に初出動、太平洋戦の後半で大いに働いている。

写真上は空母ヨークタウンから発進するSB2C-4。第9爆撃中隊の所属機である。

写真右もヨークタウン搭載機と思われるSB2C-1。折り曲げられた主翼下面に見えるアンテナは、ASBレーダーおよびABD IFF用。




5



［左ページ］硫黄島爆撃に向うSB2C-4。大戦末期の1945年1月から3月まで，空母ハンコック（CV-19）に配属された第80爆撃大隊第80中隊（VB-80）の所属機。1945年2月19日の撮影。

［上］空母バンカーヒル（CV-17）の飛行甲板で発進準備中のSB2C-1C。1944年3月から10月まで同空母配属となっていた第8航空大隊第8爆撃中隊（VB-8）の所属機。1944年6月の撮影。

（Photos：Navy National Archives）

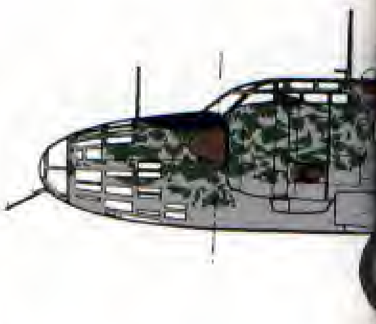
①



NAKAJIMA
Ki49-II
DONRYU

1/72 SCALE KIT

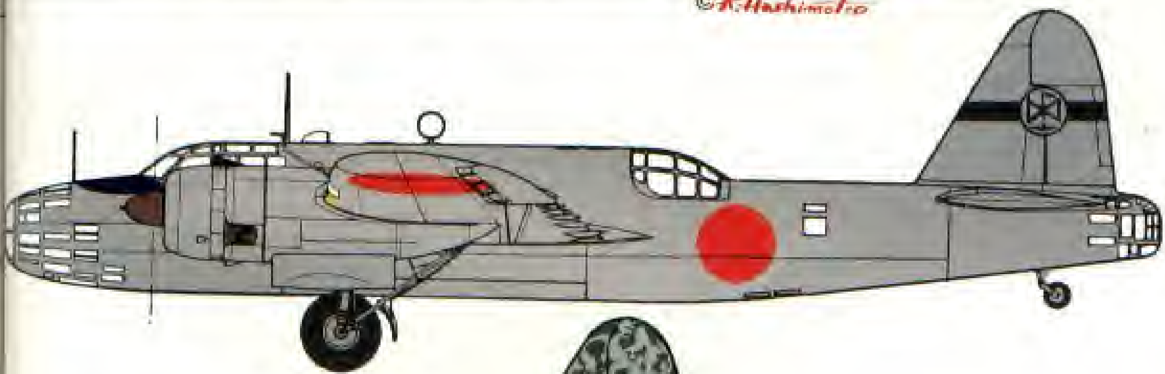
③

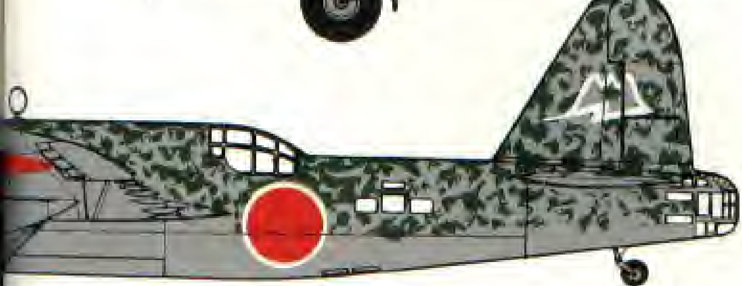


④











DRAWING BY
K.Hashimoto

201 キ49-II 飛行第62戦隊第3中隊所属機
Ki49-II, No.62 SENTAI, 3rd CHUTAI
202 キ49-I 陸軍航空通信学校所属機
Ki49-I, Army Air Communication School
203 キ49-II 飛行第7戦隊第1中隊所属機
Ki49-II, No.7 SENTAI, 1st CHUTAI
204 キ49-I 所属不明の所属機
Unit unknown.

ハイモデリングのための
レベル資料集

中島キ49-Ⅱ陸軍100式2型重爆撃機"呑龍"

NAKAJIMA Ki 49-Ⅱ DONRYU



☆キットについて☆

この本誌をごらんいただくころ新発売の予定の1/72スケール呑龍のキットは，世界で最初に発売される本格的な呑龍のモデルとして注目されるもので，キットの仕上りは素晴しく，1/72とはいえデリケートな機体内部の構成を正確に再現，例によって実感の出たエンジンを内蔵し，爆弾倉には爆弾を装備，全銃座に機銃もちゃんと付いているというデラックス仕様である。しかも1型と2型が作れるよう配慮されており，デカールは11種のバリエーションが楽しめる。このキットの基本原図は厳密な考証により新しく作図されたもので，実機のイメージを忠実に再現した決定版である。

☆塗装について☆

図①　キ49-Ⅱ。飛行第62戦隊第3中隊所属機。

2型後期の呑龍で胴体側面銃座の窓が多くなったタイプの機体，図のように窓の穴を追加してプラフイルムをはめ込むと改装可能で左右同ように窓を作る。方向舵左面のタブアームはない機体もあるから削り取ってもよい。

塗装は機体全面が陸軍明灰白色(56)で上，側面にスプレー塗装の濃緑色のはん点迷彩がある。機首光線反射よけとエンジンカウリング約2/3内側は黒または黒紺のつや消し。平面の塗装はキット附属のカラー図面を参照。

戦隊マークはあづき色（暗赤色）が第1中隊，ブルーが第2中隊，黄は第3中隊を示す。なおエンジンナセルの赤帯は図の機体だけのものである

図②　キ49-Ⅰ。陸軍航空通信学校所属機

全面ジュラルミン肌のシルバー⑧，羽布張り舵面はフラットシルバー⑧+㉚。機首光線反射よけとカウリング内側2/3が黒つや消し⑬，スピナとプロペラブレードはレッドブラウン③+㊶。

1型を作る場合はカウリング下の空気取入口を接着しないで，カウリングに付いている小さい空気取入口だけとし，方向舵左面のタブアームを削り落すと1型に作ることができる。また1型はスピナを取りはずした機体もあるから改装すると個性が出せる。

図③　キ49-Ⅱ。飛行第7戦隊第1中隊所属機。胴体側面銃座の窓は後期型または初期型のどちらでもよく，塗装は全面シルバー⑧で羽布張り舵面はフラットシルバー⑧+㉚の塗装，上・側面に濃緑色⑮のはん点迷彩があり，機首とエンジンカウリングの内側は図①②と同じ黒つや消し(53)。

図④　キ49-Ⅰ。所属不明であるが上側面が2色迷彩の面白い機体。上側面は濃緑色⑮とダークブラウン㊸+⑦の迷彩。下面は陸軍明灰白色(56)でエンジンカウリングは塗装がはげ落ちたため銀地が出ている。機首窓の中央部に白帯があり中央部は黄橙色㉛のマークが左右に付いている。機首のアンテナ柱も白で中央部1/3が黄橙色の塗り分けである。

なお全機とも尾部銃座上の開閉覆はキャンバス製なので正確な色は不明であるがカーキ(55)またはライトカーキ(53)に塗装するようにしたい。

〔イラストと解説・橋本　喜久男〕



←飛行第62戦隊第3中隊の呑龍2型。↑呑龍1型。2型とはエンジン・ナセルが異なっている。

←Ki49-II, No.62SENTAI, 3rd CHUTAI. ↑Ki49-I.

KIT :
This is the first-of-the-world full-dress plastic model kit of DRAGON. Revell kit staff members withheld to announce the completion of the proud work until the KOKU FAN September issue came out. Because, Revell staff members knew in advance that drawings attached to the kit would entirely be re-drawn to raise the value of their work and that color figures to be carried on the September issue of KOKU FAN would be of great help to model kit fans. 1/72 scale. Small but precise. Delicate and deluxe finish. Bombs in the magazine. All turrets have machine-guns. Free to build either Version 1 or Version 2. Kit fans can enjoy abundant variations with 11 kinds of decal.

PAINTING :
Fig. 1. This is the latter version of Ki49-II DONRYU belonging to the 3rd Chutai (squadron), 62 Sentai (flight group). Conspicuous is the number of turret windows on the side of the fuselage. As shown in the figure, you can make additional number of windows on both sides of the fuselage, and seal them with plastic film. You can take off tab-arms on the left side of the rudder, because some versions have not such a device. It is totally painted in Revell Color (RC) 56, Army light gray. There is a dark green dazzle camouflage sprayed on the top and sides of the fuselage. The antireflection paint on the nose and two thirds of the engine cowling (inner side) are non-glare black or black blue. A color plane drawing is attached for modelers sake. The dark red Sentai (flight group) mark shows that this belonged to the 1st Chutai (squadron). Blue is for the 2nd Chutai, and yellow is for the 3rd Chutai. It is noted that any other planes than figured in Fig. 1. had no red belt on the engine nacelle.

Fig. 2. This is the Ki49-I DONRYU which belonged to the Army Air-Communication School. Painted RC-8, silver of duralumin surface. Rudder fablic parts are RC-8 plus 30, flat silver. The nose anti-reflection paint and two thirds of the cowling (inner side) are RC-33, non-glare black. The spinner and propeller blades are RC-3 plus 41, red brown.

If you make Version 1, don't paste any additional airintake under the cowling, leaving the fixed air-intake as it is, and cut off the tab-arms of the left rudder surface. Also note that some of Version 1 planes have spinner cap removed. You can enjoy variations taking this in mind.

Fig. 3. Ki49-II. Belonged to the 1st Chutai of the 7th Sentai. You are free to make turret windows on fuselage sides either in latter version or earlier version. Totally RC-8, silver, with RC-8 plus 30, flat silver on the rudder fablic part. There is a RC-16 dark green dazzle camouflage on the top and sides of the fuselage. The nose and the cowling inside are RC-33, non-glare black, similar to Figs. 1 and 2.

Fig. 4. Ki49-I. It is not known to what Sentai this belonged to. Interesting is the camouflage of two-tone color. The top and sides of the fuselage are camouflaged with RC-16, dark green and RC-43 plus 7, dark brown. The undersides are RC 56, Army light gray. The engine cowling paint peeled off to appear the silver basis. The nose antenna strut is white except one thirds of the strut in the central part painted orange.

The correct color of the canvas cover of the tail turret, common to all planes figured here, is not known. RC-55, khaki or RC-53, light khaki is recommendable.

(Drawing and Commentary by K. Hashimoto)

呑龍の塗装に必要なレベル・カラー

①ホワイト	③レッド
⑦ブラウン	⑧シルバー
⑯濃緑色	㉕黒鉄色
㉚フラットベース	㉝黒つや消し
㊶レッドブラウン	53ライトカーキ
55カーキ	57青竹色
58黄橙色	56明灰白色



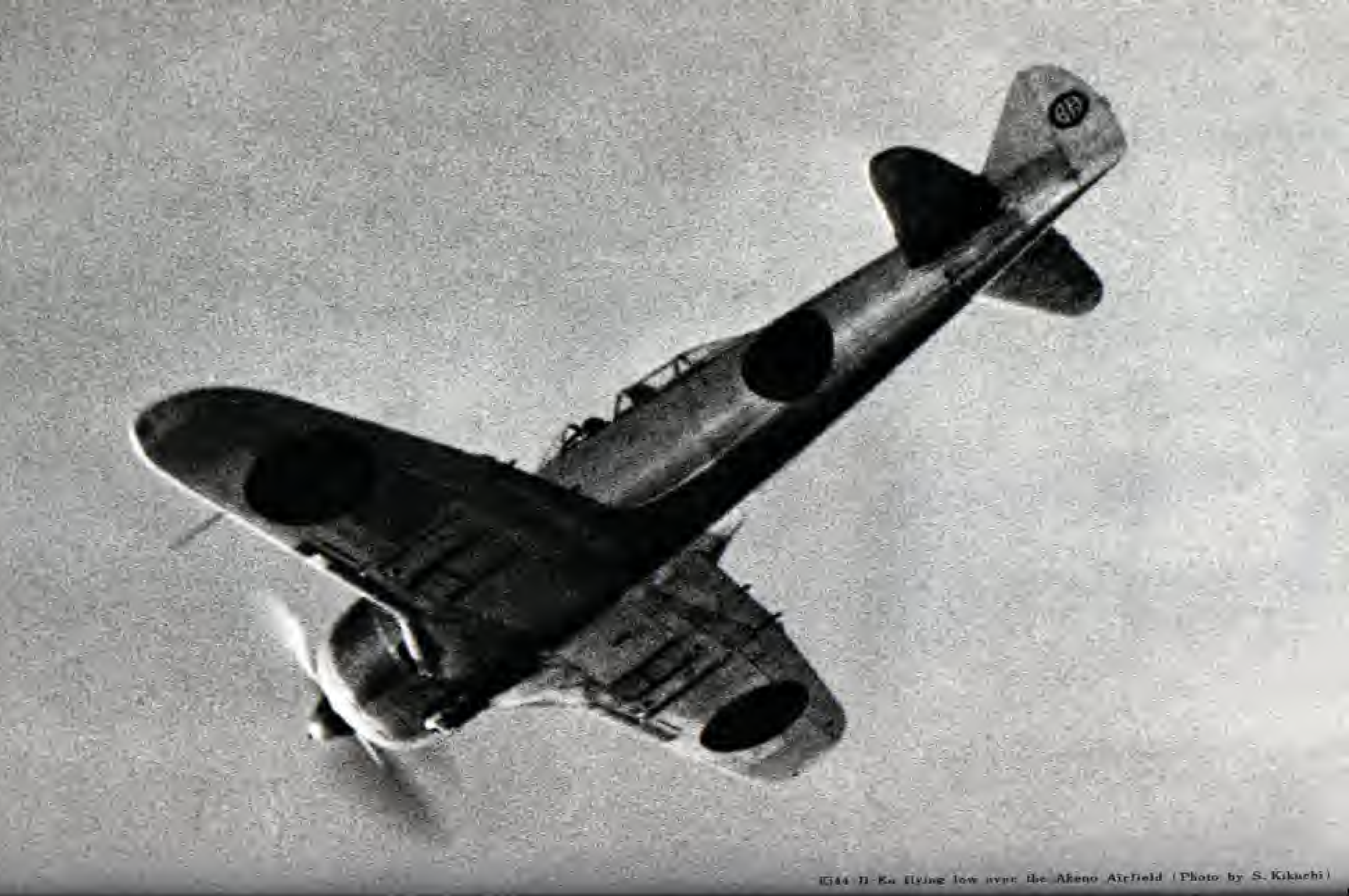
前ページの図1と同じく飛行第62戦隊のKi 49 II呑龍。全面明灰白色で上側面は濃緑色の斑点状迷彩。尾翼のマークは富士山で、図1と同じく第3中隊の所属機と思われる。

２式単座戦闘機　**鍾馗**



Army Type 2 "SHOKI" Fighters (Ki44-II-Ko) of Akeno Army Flying School (Photo by S. Kikuchi)

三重県の明野陸軍飛行学校で発進準備中の２式単座戦闘機"鍾馗"。銀地のままとまだら迷彩にした２型甲（Ki44-II-Ko）である。迷彩の１機は始動車の回転軸をプロペラ・スピナのフックにセットしてエンジン始動中。（写真©菊池俊吉）



Ki44 II-Ko flying low over the Akeno Airfield (Photo by S. Kikuchi)

〔上〕飛行中の2式単戦鍾馗2型甲。これも明野飛行学校の所属機。昭和18年12月末頃の撮影である。（写真©菊池俊吉）

⬇Ki44-II-Hei, armed with two large 40 mm cannons, of No. 47 SENTAI stationed at Narimasu Air Base near Tokyo, fall of 1944

〔下〕武装を強化した鍾馗2型甲。成増を基地に本土防空に活躍した飛行第47戦隊の所属機。鍾馗は丙型で対B-29用として主翼の武装を20mm砲2門または40mm砲2門に強化しているが、写真は甲型の機体に40mm砲を積んだもの。珍しいスナップである。"47"を図案化した尾翼のマークは赤ふちつきで、1中隊が青、2中隊赤、3中隊は黄色であった。(Photo by K. Kito)





↑→Ki44-II-Ko of No. 246 SENTAI (USAF Photos)

↓Japanese Army airplanes gathered at an unknown Japanese airfield after hav

〔上・右〕米軍に鹵獲された2式単戦鍾馗2型甲。飛行第246戦隊の所属機である。第246戦隊は昭和19年1月に大阪で2式単戦をもって補強改編。3月から中部地区防衛の任についたが、同年秋にはフィリピンに派遣されて、優勢な米軍を相手に奮戦。しかし戦い利あらず、20年2月に残存部隊は本土に引きあげている。写真はフィリピンで米軍の手に入った1機。尾翼のマークはわしを図案化したもの。



〔下〕終戦とともに米軍に接収された陸軍機。後方には4式戦疾風、100式司令部偵察機、2式戦鍾馗などが並べられている。ハンガーのなかに集められたのは、航空機用の旋回機銃。





B5N1 of Kasumigaura Kokutai (Flying Group)



A B5N1 on the way home after an unsuccessful chase to USS HORNET and ENTERPRISE which attacked Tokyo on the 14th of April, 1944.



ここの写真も前ページと同じく霞ヶ浦航空隊の97式1号艦攻。編隊で飛行訓練中のもとの、雪のエプロンで整備中のもの。全金属製低翼単葉引込脚と世界にさきがけて近代化がはかられた日本の傑作艦攻。大戦前半で大戦果をあげ、飛行機で艦を沈める航空優位の理論を実践した輝ける翼の一つがこの97艦攻であった。関東平野上空を行く細身のスマートな外形、無駄なものを極力はぶいてまとめあげる日本の名人芸，それが近代科学と結びついて結実したのがこのプロフイル。日本の翼の典形でもある。（写真©石岡政晴）

Colorfully featured are Navy Type 97 Carrier Attack-bombers (B5N1) assigned to Kasumigaura Kokutai (Air Group). Made its debut in the latter part of the Sino-Japanese Incident, the Type 97 was the mainstay carrier attack-bomber for the Japanese Imperial Navy throughout the Pacific War, including the Pearl Harbor attack, Midway and Mariana sea battles. This is the photo taken soon after the Pacific War broke out.






カ-318



ここの3枚も霞ヶ浦航空隊の97式1号艦攻。上と右は主翼を折りたたみ中の珍らしい写真。97艦攻は母艦搭載のために外翼を折りたたむようになっていたが。折りたたみは写真のように主桁上部と後桁上部の接合部を軸にして上方に折り曲げ、右翼端の上に左翼端が重なるようにセットした。右の写真は左主翼下面の折りたたみにかかっているもので、内外翼接合部の主桁と後桁下部のとってをまわして接合栓をひきぬいているところ。右翼はすでに折りたたまれている。

写真下は霞ヶ浦基地を離陸上昇中。主脚が内側に引きあげられつつある。97艦攻は、離着陸時には風防は原則として開放し置くを可とすとの注意事項がつけられていた。

（写真Ⓒ大内藤郎）

Navy Type 97 Carrier Attack-bombers of Kasumigaura Air Group in training. Right is a rare snap where the attack-bomber is in a short recess with her main wings folded.




カ-320



早期の海軍飛行艇

↑Navy Type 91 Flying-boat (Hirosho H4H1).
Above right: Navy Type 90-II Flying-boat (Kawanishi H3K2)
↓Navy Type 90-II Reconnaissance Seaplanes (Nakajima E4N2) and Navy Type 15 Flying-boat (Hirosho H1H1)







日本海軍の早期の飛行艇たち。すべて館山航空隊の所属機で、昭和８年頃の撮影である。〔左上〕広廠が89式飛行艇につづいて試作した金属製単葉の91式飛行艇（Ｈ４Ｈ１）。水冷の91式１型エンジン（500HP）を装備した１号と空冷の91式２型エンジン（600HP）を積んだ２号があったが、写真の機体は１号飛行艇である。昭和８年に制式採用され、昭和12年まで１、２号を含めて47機が造られている。〔上〕川西が海軍の要望で米国ショート社の資料を参考に試作した90式２号飛行艇（Ｈ３Ｋ２）。当時最大の金属製飛行艇。昭和５年から８年までに５機が試作された。〔下〕館山沖に駐機している90式２号水上偵察機２型（Ｅ４Ｎ２）と15式１号飛行艇（H1H1）。前方に並んでいるのは、中島がボートＯ２Ｕを原型に試作した複座の90式２号水偵２型。エンジン部や操縦席におおいをかけている。後方は、昭和４年に制式採用された広廠式の15式１号飛行艇。15式飛行艇は、エンジンを換装した２号飛行艇を含めて65機が生産されている。





2次大戦機アルバム

フェアリー　バトル　②





前号でもお伝えしたように、1940年5月14日、セダンのドイツ軍仮橋攻撃で大きな犠牲を出したＡＡＳＦ（前進航空攻撃軍団）のバトルは、その後小規模の夜間出撃に動員されたにすぎないが、それでもこの5月末までに50回近い出撃をしている。6月に入ってからは、基地の後退、移動などでほとんど出撃せず、ついに6月15日、ＡＡＳＦのバトル残存部隊に、イギリス本土引揚げの命令が下された。英本土に帰ってからのバトル部隊は、8月にドイツ軍が押える港湾の小型舟艇攻撃に数回出動したのみ。バトルの最後の出撃は、同年10月15日から16日にかけて行なわれた北フランスのブローニュ港攻撃であった。

〔左ページ2枚〕出撃するバトルⅠ。爆弾搭載量は1,000ポンド。主として250ポンド爆弾4発を主翼下面の翼内に引込む爆弾架に装備した。

〔上・下〕複操縦式にしたバトルの練習型バトルT。練習型の1号機は1939年に初飛行。100機が量産されている。





バトルは数機が各種エンジンのテスト・ベッドにも使われている。

〔上〕ブリストル　トーラス・エンジンのテスト・ベッドとなったK9331。トーラースTE.IMを装備して、1938年6月から飛行テストを行なっている。同機は39年2月からは、主脚を固定式にしてトーラスIIIエンジンを積んでいる。

〔下〕ブリストル　ハーキュリーズII(1,300HP)のテスト・ベッドとなったN2042。1939年2月からテストを開始。42年からはハーキュリーズXIエンジンのテスト・ベッドとしても使われている。主脚は固定脚となっている。





〔上〕SNETAはデハビランドDH.9を6機装備したが、のちにSABENA航空が結成されると、同航空に譲渡された。写真の機体(O-BIEN)もその1機で、1931年2月まで使われている。

エアラインの翼

SABENA ベルギー航空 ①



〔左〕ブラッセルに初めて作られた"空港"。SNETAの看板が出ている"丸太小屋"が空港待合室。後方にDH.9が見える。
〔下〕これもSNETAのDH.9の1機。客席はDH.4のキャビン上部を取りつけたので、上の写真の客席よりも余裕がある。1929年1月まで使われる。

いまアンカレッジ経由の北回り路線とアテネ・ボンベイ経由の南回り路線でブラッセルから東京まで週に13便乗り入れているSABENAベルギー航空。創立が1923年で今年がちょうど50周年。創立以来これまでに51機種、325機の飛行機を就役させている。

SABENAが結成されたのは1923年5月23日であるが、ベルギーではその4年前の1919年3月、航空輸送企画準備のための国立企業財団SNETAを発足させ、パリ、ロンドン、アムステルダムなどに定期便を飛ばせた。装備機材はデハビランドDH.9、ルンプラーC.IV、ブレゲーXIVなどであった。

